様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１５日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007　～2008
課題番号：１９７２００１０
研究課題名（和文）宋代春秋学の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on “Spring and Autumn annals” in Song dynasty

研究代表者
松﨑哲之（MATSUZAKI TETSUYUKI）
常磐大学・人間科学部・専任講師
研究者番号：４０３６４４８４

研究成果の概要：本研究は、春秋学の系譜の中に清代の浙東学者萬斯大の思想を位置づけるために計画立てられた。しかし、研究の過程で、彼の学問は当時の浙東地方の重大問題であった家族問題を根本に置いていることに気づき、その解明に重点を置き研究を進めた。そして、彼の『学礼質疑』の内容である暦・天の祭祀・祖先祭祀・宗法を中心に検討した結果、彼は天理を根拠として、祖先祭祀、宗法（家族制度）を説き、より強固な家族制度理論を確立したことが判明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	0	900,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	180,000	1,680,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：宗法　礼学　浙東

１．研究開始当初の背景

大学院以来一貫して、清代の浙東学者萬斯大・萬斯同の研究を進めてきた。浙東学は史学を重視した学派であり、主に史学の面から彼らの思想を探求してきた。2005 年には「萬斯大『学春秋随筆』の世界像（上）」（『常磐大学人間科学部紀要』第 23 巻第 1 号、p43-56、2005 年）を発表し、彼らの学問には、春秋学が強く影響を与えているのではないかと思うようになった。そこで、春秋学の系譜の上に彼らの学問を位置づけようと、まずは、宋代の春秋学を確立すべく、「宋代春秋学の基礎的研究」として課題を申請した。

２．研究の目的

宋代以降の儒学の展開の中で、礼学と春秋学が如何なる影響を社会に与えていたのか、中国と日本、それぞれについて学問の展開を検討し、両国の思想の違いについて明らかにする。それを最終的な目的とし、本研究では、その第一段階として、主に宋代の代表的な春秋解釈である胡安国の『春秋伝』などの思想を探求する。それによって、宋代春秋学が後の思想家や社会にいかなる影響を与えていたのかを検討するための基礎を確立する。それを当初の目的とした。

３．研究の方法

萬斯大・萬斯同兄弟の思想を基礎として、その淵源を探求するかたちで研究を進めた。

彼らは礼学と春秋学を重視していた。礼学においては、禘祭・祫祭という祖先祭祀、さらに郊祀などの天の祭祀や地の祭祀に重点が置かれている。そこで、次の点を中心にして検討を進めた。

（１）天と地の祭祀

天地の祭祀については、唐代に編纂され、後の経書解釈に強い影響を与えた十三経注疏に見られる思想を起点として検討を加えた。注疏の編纂者である孔穎達と賈公彦が、天や地の祭祀などをどのように位置づけているのか、その根底におかれているものは何かを検討した。そして、その思想が宋代から明代にかけてどのように展開していくのか、さらに実際にどのような祭祀が行われていたのを検討した。展開の過程は、『宋史』や『明史』などの正史の他、秦蕙田の『五礼通考』、杜佑の『通典』、陳祥道の『礼書』、馬端臨の『文献通考』などを基準にし、そこに引用された書籍などを追求することによって、確認した。そして、実際の祭祀の背景にはいかなる思想があり、それは如何なる目的のためであるのかを検討した。

（２）祖先祭祀

祖先祭祀についても、天地の祭祀と同様の方法で十三経注疏に見られる思想を基礎として、萬斯大に至るまでの展開を、正史や『五礼通考』などを通して検討した。

また、天地の祭祀と祖先祭祀の実施時期について検討した結果、萬斯大の天地の祭祀・祖先祭祀の解釈と、暦法の解釈とは有機的に結びつけられていることに気づいた。萬斯大において暦法を解釈することは、自らの天の観念を表明することでもあった。そこで、夏暦・殷暦・周暦などの古代の暦法についての歴代の解釈を確認し、そして、萬斯大の暦解釈の特徴について検討した。

（３）宗法

天の祭祀と祖先祭祀の展開を検討していく過程で、萬斯大の祭祀解釈が、家族制度（宗法制度）解釈に関連していることに気づいた。そこで、歴代の宗法解釈について検討をした。まず、『周礼』や『礼記』などの経典から、宗法制度を確認し、そして、注疏によって、その解釈の幅と原因とを検討した。それによって、経書の解釈は、経書制作時の意味を復元するのではなく、注釈者の現実社会を裏付けることに重点が置かれていることが判明した。現実の社会を立証するために経書が解釈される。そのような視点によって、朱熹の『儀礼経伝集解』、『家礼』などから宋代の宗法解釈、そして、萬斯大の『学礼質疑』における宗法解釈を検討した。

（４）春秋の思想

春秋学については、まずは『春秋公羊伝』を一通り訳出し、春秋学の全体像を大まかにつかんだ。そこから、宋代の春秋学では何が主要なテーマであったのかを、宋代の春秋解釈書である胡安国の『春秋伝』、孫復の『春秋尊王発微』などから読み解き、そして、春秋学が宋代の現実社会にいかなる影響を与えていたのか、さらに宋代の春秋学が萬斯大の『学春秋随筆』など後の思想家に与えた影響を検討した。

４．研究成果

本来の計画は研究方法の（４）が中心であり、当初はそれに重点を置き研究を進めたが、研究を進めるうちに、（１）～（３）に研究の重点が移ってしまった。春秋については、『春秋公羊伝』をすべて訳出した。しかし、今回の目的は春秋学の全体像を把握するためであり、それぞれの事例について文献学的に詳細な検討はしていない。そのため、翻訳は公表できるレベルには達していない。また、胡安国の『春秋伝』も部分的な訳出にとどまり、問題点を見つけるには至らなかった。しかし、これらによって春秋学の全体像をおぼろげながらもつかむことができ、今後の『春秋』を研究する基礎を築くことはできた。また、（１）から（３）については、次のような成果を得た。

（１）天地の祭祀と神々の世界

十三経注疏における天地の祭祀を検討した結果、孔穎達と賈公彦の礼学の根底に置かれている天の思想が明らかとなった。

礼学は中国思想の中心をなす学問であり、主に社会の秩序を整えるために利用された。その根底には天が置かれ、天によって社会の秩序が根拠づけられていた。

漢代の学問は、後漢の鄭玄によって大成されたが、その学問の根底にも天があった。その天とは、人格神的な神々の世界であり、昊天上帝を頂点とし、五行の神々がその下に置かれ、整然とした秩序体系が構築されていた。人間の社会はその神々の世界を根拠としており、皇帝はそれらの神を祖先とし、その神を祀ることによって、自らの権威付けを行うとされた。

唐代の学問は、漢から魏晋南北朝時代の解釈の終着点にあたり、それらを大成したものであった。孔穎達と賈公彦の礼学においても、鄭玄によって、措定された天の神々の世界、さらに地の神々の世界があった。

地の神々は東西南北中央にそれぞれ、句

芒・祝融・蓐収・玄冥・后土（社稷）が置かれ、それらの神々に縁の深い人を配して祀り、神と人とを結びつけた整然とした秩序を表していた。それは『春秋左氏伝』「昭公二十九」年、『礼記』「月令」、『周礼』「大宗伯」などの経書を根拠としている。しかし、それぞれの経書で、神と人との配置は異なっており、それを解釈する鄭玄や杜預、孔穎達や賈公彦などによって、独自の解釈が施されていた。神と人の配置は異なるにせよ、人格神的な神々の世界を措定し、それを背景として人間社会の秩序を成り立たせようと企図していることは同じであった。神々の世界と人の世界をつなぐものが祭祀であり、それを行うことによって秩序の根源が明らかになり、その秩序が保証されたのである。

しかし、清代の萬斯大にはこのような天の観念はない。宋代に天観念の変化があったが、彼もその影響下にあった。彼にとっての天とは、天の理法、所謂天理であり、彼の解釈においては、暦の解釈の中に組み込まれていた。しかし、天を根拠とすることは、同じであり、萬斯大も天を背景として、自らの説を組み立てたのである。

この成果の一部は「注疏における五行神と社稷神について　―孔穎達と賈公彦の解釈を中心にして―」（『中国文化　―研究と教育―』、第 65 号、p1～p14、2007 年）で発表した。

（２）祖先祭祀と宗法制度

唐代から清代にかけての祖先祭祀の展開を検討した結果、萬斯大の学問は、当時の浙東地方の重大な問題であった家族問題を根本に置いていることが判明した。

宋代は、官位の世襲は認められず、官僚になるためには、必ず科挙に合格する必要が生じた。士大夫層は家を維持するために、科挙合格者を輩出させなくてはならなかった。優秀な人物を家族から出すためには、より多くの家族の構成員が求められた。そこで、家族を団結させ、代々家を維持し続けるためのシステムの構築が必要とされたのである。それが宗法制度であった。その中心にあるのが祖先祭祀であり、祭祀に家族が集まり、家長が祭祀を行うことによって、家族の団結と家族秩序の形成が図られた。どこまでを家族とするのか、その秩序はいかなるものなのか、その制度を確立することが、宋から清にかけての浙東地方での重要な問題であった。萬斯大の学問の力点もその問題を解決することに置かれていたのである。

彼は著書『学礼質疑』の中で、暦法、皇帝の天の祭祀（郊祀）、皇帝の祖先祭祀（禘祫）、そして宗法について議論をする。それらは、それぞれ礼学の重要問題であり、これまでの礼学研究ではそれぞれ別個の問題として扱われてきた。しかし、それを一つの有機体として見ることによって、萬斯大の著作の意図が判明した。つまり、彼は、暦、郊祀、禘祫、宗法を一つの理念によって貫いて解釈したのである。その理念とは天である。この天とは、漢から唐代にかけての人格神的な神々の世界としての天ではなく、理法としての天であった。理法としての天を、天の祭祀、祖先祭祀、そして宗法に至るまで当てはめて解釈し、天を根拠とするより強固な家族制度を構築したのである。

これらの成果の一部は「浙東の禮學　―萬斯大『學禮質疑』の世界観―」（『日本中国学会報第』、第 60 集、p196～p210、2008 年）に発表した。

（３）今後の展望

これらの成果によって、礼学の根底には天があること、そして唐代から宋代にかけての天観念の変遷を把握することができた。また、家族制度の根底には、祖先祭祀があり、祖先祭祀を実行することによって家の秩序を確立し、それを社会秩序にまで発展させる儒教の理論が明確なものとなった。

このように家族制度を確立するためには、人を祭祀の対象である鬼神とするための儀礼である葬儀と、祖先祭祀は必須であった。しかし、本来の儒教儀礼は複雑であり、その実行は困難であった。そこで、朱熹は『家礼』を執筆し、葬儀と祖先祭祀の実行を容易なものとした。その結果、儒教理念が士大夫層から庶民に至るまで浸透し、宋代以降、家族制度が確立し、儒教（朱子学）が普及したという知見を得た。

日本は儒教（朱子学）を輸入し、江戸時代には官学として統治のために利用した。しかし、江戸時代の日本は儒教を主に政治や倫理に利用し、儒教において最も重要な葬儀や祖先祭祀は、ほぼ採用していない。

儒教の根底には祖先祭祀があり、家長を中心とした家族制度は、葬儀から一連の祖先祭祀を実行することによって成り立つ。それらを基礎にして社会秩序は構築されるはずである。しかし、江戸時代において葬儀や祖先供養を司っていたのは、主に寺であり、仏教であった。儒教理論の基礎の部分に、肝心の儒教は拘わっていない。にもかかわらず、江戸時代は祖先祭祀を中心とした家の秩序が成立し、朱子学的な縦社会の秩序が見事に成り立っている。そして、それは明治にまで受け継がれ、現代社会にまで影響を及ぼしているのである。そこで、日本の家族制度の確立について、仏教と儒教がどのような影響を与えていたのか、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①松﨑哲之、「注疏における五行神と社稷神について　―孔穎達と賈公彦の解釈を中心にして―」、『中国文化　―研究と教育―』、査読有、第 65 号、p1～p14、2007 年

②松﨑哲之、「浙東の禮學　―萬斯大『學禮質疑』の世界観―」、『日本中国学会報』、査読有、第 60 集、p196～p210、2008 年

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
松﨑哲之（MATSUZAKI TETSUYUKI）
常磐大学・人間科学部・専任講師
研究者番号：40364484

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし